Stativity と進行形

樋　口　万里子

1．はじめに

本稿は、stativity と進行形との関係を巡り、相容れない18世紀からの文法記述と、これまで例外視されてきた実例を考察しながら、同構文の本質的機能を追求する。

現代主流の先行研究では、進行形は「基本的に動きを表す構文で、state の表現に使うことはあり得ない（Leech et al.: 2009: 129）」とされている[1]。例えば He's being friendly 等の様に『状態動詞』の be が使われていても、それは「一時的状態」或いは「意図的にその場で friendly さを装って行っている行為」等、「何らかの変化・行動」即ち non-state を表している、と説明されてきた（e.g. Comrie: 1976, Langacker: 1989）。Vendler（1967: 112）は、I am knowing は英語に存在しないと言い、Comrie（1976: 38）も know が進行形になることはないと言う。だが、小説などでは（1a, b）の様な例に遭遇することがある。

（1a） He had to remember that this man, helpless, an object on the operating table, **was knowing** the meaning of loneliness: ultimate loneliness, not too far from the loneliness of dying.

（*In Their Wisdom*（1974）, Snow, C. P., Penguin, p. 317, 以降太字は筆者）

（1b） But they are not worrying him, because he **is knowing** that if ever he is

[1] State とは、動詞が表す描写対象（本稿ではそれを事態と呼ぶ）の区別のあり方の一つで、「時間の流れにおいて『変化や動き』が認識されない事態」で、事態を State と Non-state に大別した場合の概念だ。

appealing Major Paget in person, all is well.

(*The Village* (1966), Thomas Hinde, p. 143, from Visser: 1973: 1976)

しかしこれらも、Osselton (1980: 454) の見解では、(1a) の was knowing は was experiencing の意、(1b) は non-native speakers の英語、である。Hirtle and Bégin (1991: 121) も、これらを含めた数多くの『状態動詞』の進行形を分析し、全て微妙に何らかの変化が進行している、と同調している。しかし、これらの出典小説に目を通してみると、作家の言葉の選択をその様に処理することには、微かな疑問を禁じ得ない。(1a) は、執刀医が、手術台上の this man の悟りにも似た知覚・心情に一寸思いを向ける場面であり、this man の境地そのものに積極的な動性は必ずしも感じられない。 また、(1b) は確かに Bengali English を話す登場人物 Mr. Nagoo の意識描出部分であるが、この小説 *The Village* には、native speakers の発話や思考描写等にも、(1c) のような同類例がいくつも見られる。

(1c) What a contrast with the struggling life of the great cities he **was knowing**.

(ibid. p.121)

勿論、これは小説の舞台である英国南西部の地元で行き交う言葉を表現しているかもしれない。方言色の濃い発話が多い小説には、(1d, e) の様な、明らかに state を表している know の進行形がより頻繁に検出される。

(1d) "Can you play that tune, Colin?" Mrs. Wolfingham asked. "I wouldn't **be knowing** that tune, Mrs. Wolfingham," the young piper answered.

(*Hunting the Fairies* (1949), Compton Mackenzie, p. 180)

(1e) "Where's Robert?" he asked. "I **ain't a-knowing**." Her lips were puffed out, her voice sullen. "He ain't never tell me where he goes." "When did he go?" "This e'ening. Right after you went off. Didn't he come to the schoolhouse?

（*Walking on Borrowed Land*（1953）,William **A.** Owens, p. 257）

しかし、一般に方言というのは、当該言語を母国語としない人々にとってはわかりにくいものだが、これらの場合十分伝わってくるものがある。また、方言は普通特定地域独特で個別のものだ。しかし、このパターンは、現在のバングラデシュやインド（1c）、スコットランド（1d）、アメリカ南部（1e）と、多岐に亘る別々の広範な地域で使われ、昔の英語の名残を反映するとしばしば言及される方言、に共通する特徴である。（1b-d）を考究の対象から外すことの是非については一考の余地があるだろう。

方言でなくとも、少し歴史を遡ると、state を表す進行形がより多く検出できる。例えば、Granath and Wherrity（2013）は、COHA（The Corpus of Historical American English: Mark Davies の1810年から現代までのアメリカ英語の膨大な資料 corpus）から love 進行形132例と know 進行形66例を抽出し、方言でも non-native speakers の英語でもない know 進行形が発話に34例、地の文に9例同定でき、love 進行形は、方言や nonstandard な英語では寧ろ稀だと言う。Arnaud（2003）も、19世紀英文豪達の私信調査で発掘した類似例をいくつも並べている。筆者が当たった庶民の書簡集や、CLMET（Corpus of Late Modern English Texts）等でも同様の例を探すことは然程難しいことではなかった。Bando（2004）のデータでは、Jane Austen の主要作品で、状態動詞が進行形になっている例は21.4％を占め、状態動詞の進行形は決して例外ではないことが示される。

Hübler（1998）は、上記 Leech et al.（2009: 129）に見られる定説では説明不能の、state を表す進行形が、古英語の時代から存在してきたと主張する。だがそれは expressivity のための進行形とされ、（文学）表現技巧の一つとして別扱いだ。しかし、expressivity とは何かについては、あまり明確に説明されていない。Hübler（1998: 90）は、その例として（1b)' を Visser（1973: 1967）から挙げているが、これは先程の Mr. Nagoo の発話で、どの様な点で expressive なのか

については、やはり判然としない。

（1b）’ Stop, stop. You cannot come in here. Unless you **are having** the leavings of Major Paget?

いずれにしろ『状態動詞』が絡む進行形は、現代英語では例外扱いである。

Kranich（2010: 72）は、これらの例外を鑑み、進行形の core meaning の追求を諦めている。本稿では、それは「一時的状態を表す進行形」や expressive 進行形を特別視し、『動きや変化』の様相を全く帯びない進行形の存在を否定するからではないかと考えてみる。同じ形のものには何かしら一貫したものがある。例外的なものには、本質が顕現することもある。例外ということは、何らかの形で同じ範疇にあると見做されているということでもある。core meaning は、思いの外例外に見つかるかもしれないのだ。

と言うのも、18世紀の最も著名な文法家達（cf. Lowth: 1762: 56, Webster: 1784: 24, Murray: 1795: 81）が、I am loving を、進行形の筆頭例にしているからである。Lowth は18世紀で英文法最高権威、Webster は今でも辞書の代名詞、絶大な出版数を誇った Murray は19世紀英文法の代名詞である。Wischer（2003: 165）は、I am loving など実際には使われることはなかっただろうと言うが、容認不能な文を彼らが説明に使ったとは、何であれ非常に考えにくい。Visser（1973: 1980）は、中英語期からの love 進行形を15例列挙しており、神様の愛を語る14世紀の例もある。他にも、I am loving を代表例として使う19世紀の文法書は驚くほど多い。

20世紀に差し掛かる頃から、文法書で I am loving が進行形の代表例として用いられることはなくなるが、それでも、その頃の第一人者の書 Sweet（1900: 105）も、進行形の唯一の例として I am seeing を使う。Myers（1952: 176-177）の説明でも、I am loving や They are knowing は稀であっても、stativity は進行形の容認性は左右しない。Visser（1973: 1923-1925）は、進行形を、「事態の描

写をある時点に局所化する」構文としている。こういった見方は、Lowth や Webster の記述とも、Goldsmith and Woisetschlaeger (1982) を始めとする様々な現代の考察とも、通ずるところが極めて大きい。本稿では、この点に着目し、できる限り使用文脈を考慮に入れ実例を吟味しながら、Visser の見解を進行形の本質を的確に捉えたものとして支持し敷衍する。

その上で、本稿では、「進行形は、事態を見る範囲を絞り、クローズアップして対象を捉えるための構文」と仮定すると、より包摂的に進行形現象を捉えることができることを示したい。例えば、(1) 何故進行形は、口語に多く、近代目覚しい発展を遂げた様に見えるのか、(2) 何故『状態動詞』の進行形は頻度が低いのか、(3) 何故 It's being 5 o'clock が奇妙なのか、(4) 何故 I'm promising to come back は遂行文として機能せず発話行為の説明文になるのか、(5) 何故 He is constantly wanting to make policy は感情的な印象を与えるのか、などの疑問解決が可能である。

まずは、次節で stativity の輪郭を押さえ、実際にはずっと使われてきた state 進行形を考察する。次に 3 節で、state/ non-state という概念との関係において、進行形がどう説明されてきたかを追い、4 節では、(1) (2) に関わる進行形の本質を論じる。それらを踏まえて 5 節で (3) 〜 (5) などの謎に取り組み、本稿案の有効性を検証する。

2．Stativity の輪郭と進行形

英文法や言語学では、動詞の表す事態は、しばしば state または『状態』、とそれ以外の non-state とに識別される。state とは、動きや変化のない事態とされ、英語の場合「進行形にならない」といった形で最も顕著に言及される。だが、そこには様々な問題がある。

まず、通常日本語の『状態』は、「変化する物事のその時その時の様子（『大

辞林』、1988、三省堂)」である。英語でも a changing state と言えば、「変化している状況」を意味し、決して「変化している「変化のない状況」」という理解不能表現ではない。日本語でも英語でも、物事は全て常ならむもの、「変化するもの」である。状態にもいつかは終局を迎えるという変化が起きる。恒久的な The earth rotates to the east という状態も50億年後と言われている地球の終焉とともに成立しなくなる。究極的には動きや変化の起きない事態など本当は存在しない。また、It's 5 o'clock sharp も state である。state を動きや変化を伴わない事態と定義するのであれば、state は幻想の様なものだろう。

その上、変化のない事態である筈の state は、「変化のある state」と「変化のない state」に細分され、変化のある state は non-state の範疇に入れられる。例えば、(2a) の live は、「一時的なので state ではなく non-state」を表しているとされる。

(2a) He **is living** in London.

(2b) He lives in London.

しかし、(3a) が示すように、居住が一時的でも (2b) が使えない訳ではなく、一般的な意味では一時的とは言い難い場合でも進行形が使われこともある (3b)。

(3a) He lives in London right now.

(3b) He has **been living** here all his life.

Comrie (1976: 50) は点的な state などあり得ないというが、(4) はどうだろうか。

(4) It's 5 o'clock sharp. / He was there for a second.

また、He's asleep と He's sleeping とには事態の継続性に客観的な違いはあまり感じられない。一方は state で他方は non-state という二項対立は成り立つだろうか[2]。進行形を試金石にしてしまうと、state の輪郭は曖昧模糊としてしまう。

というのも、進行形には、先行研究の例外処理説明に収まらない実例が思いの外存在するからである。例えば Arnaud (2003) は、19世紀文献から (5a, b, c)

などを挙げている。

（5a） We pray for the King's Life, for（we think that we shall **be having a peace** with a new Ministry）before we have drubbed the French.
（*The Letters of William and Dorothy Wordsworth The Later Years,* Vol. 3, p. 1348: 原典から括弧外部分を補足）

（5b） If you **are seeing that honoured woman** will you kindly mention this little fact to her? （Eliot, 1880, from Arnaud: 2003: 16）

（5c） Two years ago, three men **were loving her**, as they called it
（E. Barrett-Browing, 1846, from Arnaud: 2003: 16）

If you are seeing などは、（5b）' のような形で、今日も頻繁に目にするフレーズである。

（5b）' If you **are seeing this {page/ message/ popup}** it is likely that you need to reboot your computer.

次の（6a, b）は、18世紀中盤の料理エッセイであるが、stativity の観点からは、単純形との違いは感じられない。

（6a） ... and the Women have the Care and Management of every Business within doors, and to see after the good ordering of whatever **is belonging to the House**.（*The Country Housewife and Lady's Director,* 1732, from CLMET）

（6b） a Fruit **is** as tender as it can be, and **possessing its highest Flavour**:
（ibid.）

（7a）（7b）は1900年前後の英国庶民の書簡、（8a）は英国（8b）は米国の20世

---

[2] He's asleep と He's sleeping はもともと祖先を同じくし異なる変遷を辿った二つの形とみる研究もある。進行形には、より口語的な be a-Ving という形もあったのも事実だ。a-V-ing は今でも現在分詞として方言では現役だが、V-ing は名詞・動名詞・現在分詞・形容詞でもあり、a-sleep の sleep の方は名詞とも動詞ともつかぬものだということを考慮に入れる必要がある。

紀の公文書である。

（7a） ..., the trade **is seeming to be** going on a great deal better than it has of late .... （*The Clift Family Correspondence*, 1794, p. 92）

（**7b**） Mr. Hewer **was wanting you** out of the House. （ibid., 1795, p. 104）

（8a） But I put to you the case of a man who does not want to sell his property, where he simply owns his property in the belief that he **is owning it** under a good title.

（*Reports of the commissioners Presented by both houses of Parliament by command of His Majesty by Great Britain*, Published 1911. Royal Commission on the Land Transfer Acts:10 December 1908 Mr. H. M. Knowles. Mr. Trenn Hart. Called in and examined. 2855）

（8b） “The law compels me to grant this petition,” said Judge Welch, “but I will endeavor to find a way to avoid such wrongs. We do not allow a Japanese to own land. And yet he **is owning it** in his children’s names.”

（*Administration of Immigration Laws Hearings* 1920 Washington Government Printing Office. p. 404）

これらは、単純形だった場合と同じ意味同じ感覚で完全に interchangeable に使われている訳ではないようだが、non-state の範疇に入れることには無理がある。では stativity と進行形の関係はどう捉えるべきだろうか。

ここに一つ、問題解決の糸口を Langacker の認知文法の枠組みにおける言語観に見出すことができる。客観的には同じ事象でも、我々は様々な捉え方をする。言語は客体そのものではなく、認知主体の物事の捉え方を反映し、同じ表現も様々な解釈を生みうる、というものだ。例えば、認知主体の位置移動を客体のものに転換し、時速60 miles の車窓から眺める光景の中の電信柱を（9）のように表現することがある。

（9） The telephone poles are rushing past at 60 miles per hour.

（Langacker: 1991: 266）

これは進行形と state の関係にも応用できる。客観的には同じ状態も、認知主体の側からは異なる捉え方ができる。例えば、先ほどの（2a）と（2b）は、いずれにせよ永遠ということはない。客観的にはどちらも 2 〜 3 年なり同じスパンの homogeneous な state でも構わない。

（2a） He lives in London.

（2b） He **is living** in London.

Langacker 自身（p.c.）は、（2b）の live は non-state（彼は perfective と呼ぶ）表すとする。だが、本稿では、これを state と見せる場合もあるとし、それを認知主体が時間的に限られたスコープで捉えていると考える。スコープ内で事態に変化や終わりがないコトを state と考えるのだ。

ある光景は、広角で捉えることもできれば zoom で接写して見ることもできる。そういった空間認識を、時間の流れを認知 domain とする、動詞の表す事態認知に置き換え、state を図 1 、 2 の横線で表してみる。state は、いつかは終わるが、それはいずれにせよスコープの外にある。単純形は、図 1 のように、事象をより大きな時間的広がりにおいて捉え、進行形は、図 2 のスリットの様なスパンで切り取って、至近距離から見て描く形と捉えてみる。

図 1 図 2

即ち、単純形も進行形も、客観的事象としては state を対象とすることができるが、scope of predication に違いがあると考えるのだ。視野の広狭は相対的な

問題で、必要性に応じて限る場合に進行形が使われるというわけだ。

state とは、いずれは終焉するものではあっても、それを視野に入れないものである。(2b) の He is living in London は、現在時の状態に視野が絞られているから一時的な感じがすると考えることができる。こう考えると、古今の文法学者の記述とも高い整合性がある。

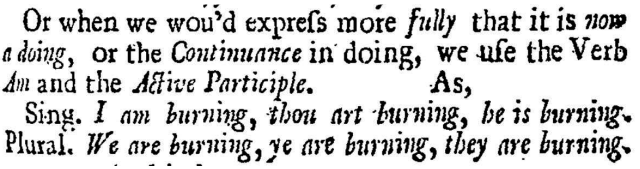
3．進行形記述の300年

3.1 I am loving を冠する記述

進行形に関する文法記述を紐解くと、実は300年を通じて I am loving と矛盾しないものが非常に多い。Wischer (2003: 162) は、英文法書で進行形に言及したのは、おそらく Miege (1688: 67) ではないかと言う。そこでは現在進行形は、単に単純現在形のもう一つの形として紹介されている。その後も進行形は多く単純形の variant として扱われ、Barrett (1837: 65) も I run と I am running を同義とする。

一方、両形式の違いに少しだけ踏み込んだのが、(10a) や (10b) に挙げる Greenwood (1711: 143) や、前述の Lowth や Webster、Brittain (1788: 99-101) 等である。そこでは (10a) に見られるように、その識別の眼目は state かどうかということころにはない。"the *Continuance* in doing," は state のことである。

(10a)


Or when we wou'd expreſs more *fully* that it is *now a doing*, or the *Continuance* in doing, we uſe the Verb *Am* and the *Active Participle*. As,
Sing. *I am burning, thou art burning, he is burning.*
Plural. *We are burning, ye are burning, they are burning.*

(Greenwood: 1711: 143)

この様に、Greenwood は、単純形と比して、進行形はイマ生じていて継続中で

あることをより明確に述べたい時に使うと述べる。Lowth の説明も、(10b) のように概ね同趣旨であり、１節でも触れたように、進行形の例文に用いられている動詞は、唯一 love のみである。

(10b)

But in diſcourſe we have often occaſion to ſpeak of Time not only

as Preſent, Paſt, and Future, at large and indeterminately, but alſo as ſuch with ſome particular diſtinction and limitation; that is, as paſſing, or finiſhed; as imperfect, or perfect. This will beſt be ſeen in an example of a Verb laid out and diſtributed according to theſe diſtinctions of Time.

Indefinite, or Undetermined, Time:

Preſent,	Paſt,	Future,
I love;	I loved;	I ſhall love.

Definite, or Determined, Time:

Preſent Imperfect: I am (now) loving.
Preſent Perfect: I have (now) loved

Paſt Imperfect: I was (then) loving.
Paſt Perfect: I had (then) loved.

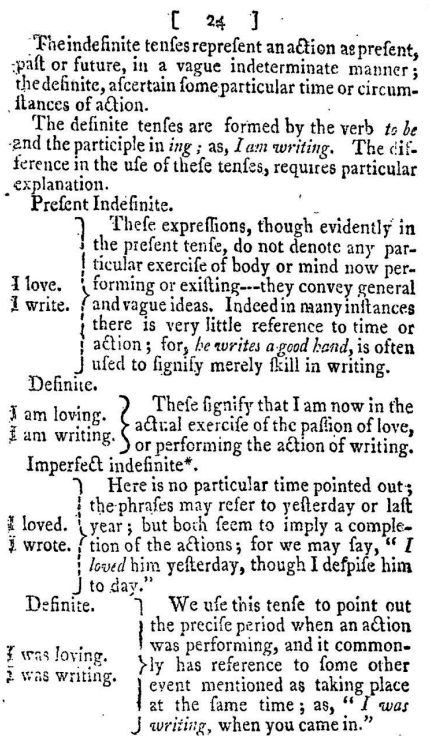
FutureImperf. I ſhall (then) be loving.
Future Perf. I ſhall (then) have loved.

(Lowth: 1762: 55-56)

進行形は Definite（限定的）とあり、本稿案と矛盾しない。

これを詳細に敷衍したのが (10c) に見られる Webster (1784: 23-26) である。

(10c)



[24]

The indefinite tenſes repreſent an action as preſent, paſt or future, in a vague indeterminate manner; the definite, aſcertain ſome particular time or circumſtances of action.

The definite tenſes are formed by the verb *to be* and the participle in *ing*; as, *I am writing*. The difference in the uſe of theſe tenſes, requires particular explanation.

Preſent Indefinite.

I love. I write. — Theſe expreſſions, though evidently in the preſent tenſe, do not denote any particular exerciſe of body or mind now performing or exiſting---they convey general and vague ideas. Indeed in many inſtances there is very little reference to time or action; for, *he writes a good hand*, is often uſed to ſignify merely ſkill in writing.

Definite.

I am loving. I am writing. — Theſe ſignify that I am now in the actual exerciſe of the paſſion of love, or performing the action of writing.

Imperfect indefinite*.

I loved. I wrote. — Here is no particular time pointed out; the phraſes may refer to yeſterday or laſt year; but both ſeem to imply a completion of the actions; for we may ſay, "*I loved* him yeſterday, though I deſpiſe him to day."

Definite.

I was loving. I was writing. — We uſe this tenſe to point out the preciſe period when an action was performing, and it commonly has reference to ſome other event mentioned as taking place at the ſame time; as, "*I was writing*, when you came in."

I am loving は愛する気持ちが今実感される状況を表すと書かれている。これは今日でも歌などに頻出する場合に繋がっているのではないだろうか。進行形を、今実際に生じている気持ち／行為を表す形として Webster が捉えているところに着目しておきたい。18世紀の文法家達は、言語学者としては素人だという研究もあるが（cf. Dons: 2004）、この（10c）は当時の感覚の証言とも言えよう。上記 (5) ～ (8) に関する十分な説明にもなる[3]。

[3] 他の多くの19世紀の英文法書と同じく、例文としては love- 進行形ばかりを挙げているにもかかわらず、Farnum (1842: 41) は、動詞 love が進行形で使われるのは稀だと書いている。しかし、それは、書き言葉として目にすることが少なく、使うことがあってもほとんど意識することないという意味ではないかと思われる。時空を共有する相手への気持ちであれば、基本的にその場で無意識に音になり文字化されないことは多いだろう。

また、上述の Myers の実際の言は次の（11）である。

（11） Verbs indicating states of mind or attitude are also likely to be in the simple tenses, probably because the speaker usually thinks of his attitude as continuing. We rarely say “I am liking,” “I am loving,” “He is hating,” or “They are knowing” unless we wish to put special emphasis upon both the immediacy and the intensity of our attitudes（“I am simply loving this dance.”）Similarly, “I admire him” indicates a habitual attitude; “I am admiring him” indicates a temporary, active appraisal. （Myers: 1952: 177）

この immediacy というのはまさに「至近距離で見る」捉え方とする、本稿案と同期する。ズームし視野を狭めて見るので、そこに意識は集中するから強調につながりイメージも鮮明になる。I am simply loving this dance というのは、相手と共有する時空における目の前のダンスへの気持ちであろう。上述したように、Visser（1973: 1923-1925）も、「事態のある時点に局所化する場合に選ぶ構文」としている。

こういった、Greenwood, Lowth, Webster から Myers, Visser に脈々と連なる進行形に関する観察記述には、描く事態が動的 non-state でなければならないという制限感覚は感じられない。state かどうかは、進行形の使用を左右する直接的な縛りになっていない。進行形の表す事態には、稀ながらも state の場合もあると考える、本稿案と整合する。

3.2 I am loving 排除派とその背景

一方、進行形では love などの動詞は使えないとする記述が、18世紀末に登場する。そういった禁則に最初に言及したのは、恐らく Pickbourn（1789）だろう。

(12a)

* Verbs ſignifying a continued energy, or an affection of mind, have no tenſes compounded with the participle in *ing*. In theſe verbs we always expreſs the action, whether definite, or indefinite, by one of the former tenſes; as *I love*, or *do love*: for we never ſay, *I am loving*. The reaſon of this will be

(Pickbourn: 1789: 27)

著者は、当時最高峰の誉れ高き Beattie や Lowth を決然と批判しつつ、この禁則を３回も繰り返している[4]。しかしここには、単純現在形との対照における進行形の特性を際立たせたいという意図が感じられる。前書きによれば、同

4

Secondly. The diſtinction between perfect and imperfect tenſes does not extend to verbs which denote a continued energy, or affection of the mind; from the very nature of them, they are incapable of it: their participles in *ing* are therefore never made uſe of in forming compound tenſes. We do not ſay, *I am loving*, *I am fearing*, *I am hating*, *I am approving*, *I am knowing*; but we ſay, *I love*, *I fear*, *I hate*, *I approve*, *I know*, &c. Nor do we ſay, *I have been loving*, *I have been hating*, &c. but, *I have loved*, *I have hated*, &c. Nor in the paſſive voice can we ſay that any thing *is*, or *has been*, *loving*, or *fearing*; but that it *is*, or *has been*, *loved*, or *feared*. For theſe verbs expreſs

(1789: 81)

* Had Dr. Beattie attended to this diſtinction, he would not have ſaid, p. 393, that "*amabam*, "in our common Latin grammars, ought to "be tranſlated by, I *was loving*." He ſhould rather have remarked, that *amo* is not the moſt proper word to be given to boys as an example of the firſt conjugation; for, as it ſignifies an affection of the mind, it is not ſo well adapted to diſplay the full powers of the Engliſh verb, and ſhew its correſpondence with the Latin, as ſome others are.

Biſhop Lowth enumerates, I *am loving*, I *was loving*, and I *ſhall be loving*, amongſt the tenſes of the Engliſh verb, p. 63. But if the diſtinction which I have made above be juſt, they ought to have been omitted; or, rather, he ſhould have taken for his example ſome other verb, which does not ſignify a continued energy, or affection of the mind.

(1789: 82) (1789: 83)

書は彼がある時フランス人に問われて答えに窮したI loved/I did love/I was loving/I have loved の違いについて、15年かけて追求した結果をまとめたものである。この前書きの締め括りにあたって、(12b) の様な表現があるところを見ると、これらの形式の違いの明確化が、英語という言語の名誉の為に必要だという使命感もあったようだ。

(12b) Truth, and the reputation of the English language, have been the sole object of my pursuit: (1789: xxxi)

前書きでもう一つ看過できないことは、フランス人に説明を求められた際にI was loving に対して誤りや奇妙な文とは答えていない点だ。母国語の直感というものは基本的には即座に働くであろう。指摘していないということは誤りという感覚がなかった可能性はあるだろう。

持論が直観に影響をもたらすことはありがちなことである。単純形と進行形の相違を明確に打ち出す目的が、禁則に至った理由の一つである可能性はある。Visser も、contain, consist of 等の動詞は進行形を取ることはないと言う (Visser: 1973: 1969)。だがこれらの動詞も (13a) (13b) の様に、ごく自然に生起することはある。

(13a) A Thermos, as you probably already know, is just a special kind of container that insulates whatever liquid **it is containing**. That means that it is very difficult for heat to flow in or out of the Thermos. However, a Thermos is not a perfect insulator, ...

(13b) It is **consisting of** *combustible waste, like paper, cartons, rags, grass cuttings*, leaves, wood scraps, sawdust, and floor sweepings from domestic, commercial, and industrial activities.

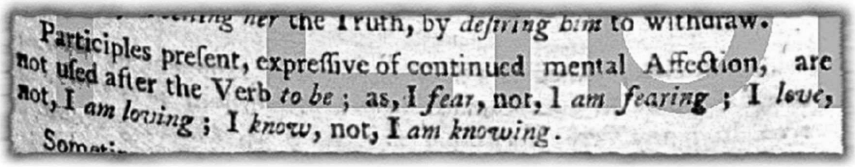
勿論 Visser がここで consist を挙げているのは、Water consists of hydrogen and oxygen などでの使われ方を想定しているからである。彼の言わんとするところ

は、そういう物事の不変の真理・原理・自然法則などの表現には、validity を今に限る為の構文である進行形は、使わないということだ。

もしかすると、Pickbourn が I am loving を否定したのも、本当のところは、これと似たようなことだったかもしれない。実は Pickbourn (1789: 26) も、詳しい記述では、definite という用語を使い、進行形に関して Lowth と共通する所見も述べている。そして、進行形は「既に始まっていて今進行中でまだ終わっていないことが含意される動作を、現在の瞬間や今に限定し表現する」と敷衍している。ここでは、単純現在形で表される state も、既に始まっていて今進行中で、まだ終わっていないことが見逃されているが、この後半の「現在の瞬間や今に限定し表現する」というくだりは、本稿案と矛盾しない。(12a) に引用した、彼の「継続的な状況や愛情を表す時は、進行形は使わない。I am loving は適切でない」という見解は、単純形を、非常に今日的に様々な事例を挙げつつ継続性 (state) の表現とした彼が、進行形との対照を際立たせる為だったかもしれない。彼の脳裏には、love が継続的な思いを表す場合だけが浮かんだのかもしれない。

ところが、Lowth との共通認識を含む詳しい部分は、後継書、例えば Knowles (1796) 等では捨象・単純化されてしまい、禁則だけが (14) の様な形で残った。

(14)


Participles preſent, expreſſive of continued mental Affection, are
not uſed after the Verb *to be* ; as, I *fear*, not, I *am fearing* ; I *love*,
not, I *am loving* ; I *know*, not, I *am knowing*.

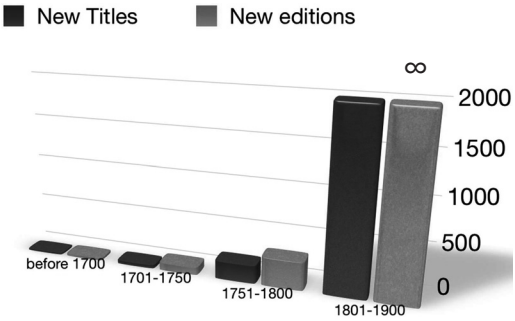
Participles present, expressive of continued mental Affection, are not used after the Verb *to be*; as, I *fear*, not, I *am fearing*; I *love*, not, I *am loving*; I *know*, not, I *am knowing*. (Knowles: 1796: 59、大英国図書館蔵)

この Knowles (1796) は、*The Principles of English Grammar with Critical Remarks and Exercise of False Construction. Adapted to the Use of Schools, and Private Tutors*. というタイトルの通り、理屈抜きに文法規範を並べただけのものである。Tiekenboon van Ostade (2011: 255) は、近代で最も禁則の多い文法書としている。同書初版は37頁足らずの短い規則集だったが、進行形説明としては Pickbourn から禁則部分だけを取り入れた1793年の４版が、書評で絶賛され、そのまま1796年に London で２回も出版された。

当時こういった規範集の需要は極めて高かった。英国では、それまで固定的だった社会階層が産業革命によって流動化し、それまで一握りの人々のものだった読み書きに参加することにより他の人々にも立身出世が可能となった。だが、そのためには、品格ある正しい英語を話し書く術を身につけることが必要不可欠だった（cf. Beal: 2004)。正しい英語というのは、上流階級の使う品位の高い英語であり、それ以外の一般人にとって、自らの言葉遣いは矯正されるべきもの、律しなければならないものであった。Rothwell (1797: 139) は、英国でも米国でも学習者たちは誤り是正練習問題を他の何よりも好んだと述べている。Murray も、何度も繰り返して文法を体に染み込ませる重要性を端書きで説いている。当時の文法書のタイトルには、どれをとっても、簡便に学べるという謳い文句が並ぶ。難しい理屈は抜きにして暗記する為の禁則集は必需品だった様だ。

近代後期、「英語を正しく話し書く術」を指南する英文法書は爆発的に売れた。Alston (1974) 及び Görlach (1998) に照らすと、英語で書かれた新刊英文法書数は1700年以前では僅か12、次の50年間は32だったのが、18世紀後半で200以上に増え、19世紀は Alston が挙げているものだけで2000冊近い。目を見張る増版増刷、数え切れない impression 数を重ねているものも多い。グラフ１において1800年代の New editions の値は実は無限大だ。

グラフ１：Explosion of Grammar in Late Modern English Period



（Alston（1974）及び Görlach（1998）のデータに基づく）

その中でも他を圧倒的に引き離し群を抜いているのが、Lindley Murray の *English Grammar* である。ここには特筆すべき興味深い事実がある。1795年初版の同書は、1798年の第４版まで、（15a）の様に love を使って進行形を説明しているにも関わらず、1799年の第５版では、（15b）の様に love が teach に取り替えられ、しかも I am loving の類の進行形を禁ずる一文が唐突に盛り込まれているのだ。

（15a）

The active verb may be conjugated differently, by adding its preſent or active participle to the auxiliary verb *to be*, through all its moods and tenſes; as, inſtead of "I love, thou loveſt, he loveth," &c.; we may ſay, "I am loving, thou art loving, he is loving," &c. And inſtead of "I loved," &c. by ſaying, "I was loving," &c. and ſo on, through all the variations of the auxiliary.

⬆（Murray: 1795: 61, English Grammar, the 1st edition）

（15b）

The active verb may be conjugated differently, by adding its preſent or active participle to the auxiliary verb *to be*, through all its moods and tenſes; as, inſtead of "I teach, thou teacheſt, he teaches," &c.; we may ſay, "I am teaching, thou art teaching, he is teaching," &c. And inſtead of "I taught," &c. by ſaying, "I was teaching," &c. and ſo on, through all the variations of the auxiliary. This mode of conjugation has, on particular occaſions, a peculiar propriety; and contributes to the harmony and preciſion of the language. Theſe forms of expreſſion are adapted to particular acts, not to general habits, or affections of the mind. They are very frequently applied to neuter verbs: as, "I am muſing; he is ſleeping."*

（Murray: 1799: 61, the 5th edition）➡

180度の大転換である。この段落は、11頁に亘り一貫して動詞 love の活用羅列が続く最後にある。僅か一年で起きたこの変化が物語るのは、禁則が Murray の

言語直感に基づいたものではなかった可能性である。

Murray は文法の専門家ではなく、言わば素人である。*English Grammar* の内容・文面はオリジナリティーに非常に乏しい（cf. 1797年第 3 版の書評、*Critical Review*, p. 227、Görlach: reprint 版はしがき）。例えば単純現在形の説明は、Coote（1788: 88）の丸写し（Coote の解説は現在進行形も兼ねているので例文を一部だけ差し替えているが）と Pickbourn（1789: 20-24）の一部をつなぎ合わせただけである。他事項についても、名の知れた先行著述から厳選抜粋し、分かりやすさ第一で、体系化に心を砕いたようだ。

自身の手記（Murray: 1826: 90-91）によれば、同書は、知人の求めに応じ女生徒達の為に編纂したものだ。読者が誹りを受けることのないよう、細心の注意を払い万全を期したようだ。彼が傾注したのは、規範たるべき世間一般で受容された文法指針だったであろう。初版発刊の際に誉れ高き Lowth や Beattie（1783）に習うのは当然至極、 4 版脱稿まで I am loving の正当性に何の疑念もなかっただろう。また彼は、版毎に、世間で評判の時流の書評に敏感に反応し微妙な加筆修正を施している。注目を浴びた力強い Knowles や Pickbourn の禁則を見逃した筈はない。（15b）に見られる affections of the mind という用語の流用には Pickbourn の影が見え隠れする。とは言え、前年使った手前、流石に「I am loving は言わない」とは書けなかっただろう。Murray は裕福だが商家の生まれで、上流階級に囲まれて母国語を習得したわけではない。文法書とは、上流の人々が使う正しい英語を記載するものであって、自身の言語直感などを反映させる筋のものではなかった。

同禁則が規範を意識する際の言葉使いを律するようになったのは、Murray の書が、世の中で切望されているものだったからかもしれない。素人だったからこそ読者の側に立ち万人に分かりやすくできたのかもしれない。*English Grammar* の発刊数は桁外れだ。Alston（1976）の英文法書誌リストでも、64版までが並

び圧巻だ。しかも同じ版が様々な国様々な都市で、同年に複数の出版社／印刷所で複数年に亘って出版されている。Jones（1996: 77）は、1891年に69版が出ていると述べており、1907年に印刷された1875年版第66版の the 72th impression なども日本に現存する。1799年まで毎年５万部の売れ行きを記録し、Longman が版権を買ったが、版年不明のものや海賊版も数知れない。しかし、名の知れた出版社も多く、彼が文法書からの収入も殆ど教会に寄付したことを考えるとそれは、Murray が著作権を行使せず、誰でも自由な出版ができたからではないかと思われる。それは禁則の浸透を更に促進しただろう。Murray は他にも多数の文法書綴り方教科書の類を出し、どれも数限りない書評で絶賛され、総数は1800～1840年間で1550万部（Bryan A. Garner: 2013）を超えた。この数字は、1800年前後の英米合算推定人口に、自分の名前の読み書きがやっとできる人も含めた識字率をかけた数が、600万人前後だったことを考えると驚愕的である。Nordquist（2015）は、19世紀前半で他を遥かに凌ぐ最も売れた著述家だったと言う。Turner（1840）はその前書きで、Murray の書は使い勝手で右に出るものはなく、出版された直後から殆どすべての学校教育で教科書となったと記している。残念ながら、それを示す証拠は残っていないない模様（cf. Austin: 2003）だが、Murray の名は、エリオット、ディキンズ、ハリエット・ビーチャー・ストウ、ギャスケル、ジョイス、コルリッジ、エドガー・アラン・ポー等々、19世紀英米主要文学作品でも、文法書の代名詞だ（Reibel: 1996: 11）。その大方のニュアンスとしては、（16a-c）の様な、叱責する教師に繰り返し無味乾燥な規則の暗記を余儀なくされた苦い経験を背景とした諧謔がモチーフだ。

（16a）Mrs. Garth, like more celebrated educators, had her favorite ancient paths, and in a general wreck of society would have tried to hold her ‘Lindley Murray’ above the waves.

（*Middlemarch*, Book III, Ch. 24, Norton, George Eliot, p. 169.）

（16b）Mrs. Tibbs inquired after Mrs. Bloss' health in a low tone. Mrs. Bloss, with a supreme contempt for the memory of Lindley Murray, answered various questions in a most satisfactory manner.

（*Sketches by Boz*, 1895, Charles Dickens, p. 225.）

（16c）His conversation was in free and easy defiance of Murray's Grammar, ...

（*Uncle Tom's Cabin*, 1852, Ch. 1, Harriet Beecher Stowe, p. 1.）

風刺画集などもある。パロディー化されるということは、文字が読める人なら誰も知らない人はいないくらい世の中に行き渡っていたことを示すだろう。Jones（1996: 78）は「Murray の文法書によって浸透し永続的となった、18世紀の規範に端を発する、文法規範意識から逃れられる英米人は殆どいないだろう」と述べている。進行形は、英語の最も基本的な形式の一つである。単純化された禁則が社会に浸透した背景には、Murray が絡んでいる可能性がある。書き言葉で I am loving の使用頻度が激減したのは、規範の利便性を意識し、身に付ける為に手にした文法書で禁じられていたからかもしれない。

更に、禁則を引き継いだ文法書も、非常に高い人気を誇った。Murray に極めて類似した文言で I am loving を良くない英語と記す Butler（1879: 91, 1845初版）、Kerl（1868: 24）、Reed and Kellog（1880: 216, 初版は1877）も、いずれも増版に増版を重ねた。19世紀の文法書10傑の一つとしても、スコットランド人の為の啓蒙書としても名高い Bain（1872: 115、初版は1863年）も、地元の訛りにある I am loving の類を避けるよう警告する（Arnaud: 2003）。ともあれ、起きもしない行動を禁ずる法律は必要ない。I am loving が禁じられたのは、少なくとも話し言葉では、実際に使われていたからに他ならない。

一方で I am {loving/ hating} は、書き言葉では元々稀で、文筆活動で使わなくても困ることは殆どない。また口にする度に叱責され抑圧されれば、益々見聞きする頻度も減る。さすれば当然、非常に稀な表現と感じられるようになるだ

ろう。

単純形と進行形の区別を明確にしたい思い、その単純化、Murray の空前絶後の影響力などが相まって、禁則は、言語直感にすら影響を及ぼすほどに英文法規範に染み亘ったかもしれない。言語のあり方を観察し記述するのが言語研究だが、規範文法は人々の進行形の使用域を左右するほどに人々の頭脳に叩き込まれたかもしれない。禁則が人為的なものであるならば、規範から自由になった場合などで事実実際に使われてきたことも、先行文法書で I am loving が使われるのも至極当然だ。これが案外 I am loving 規律の真実である可能性は少なくないように思える。

3.3 規範と事実の狭間

実のところ、多くの学究において、I am loving の類は単に稀だとしか書かれていない。例えば R. A. Close は、彼の *The New English Grammar* III 26 頁で、「see, hear, like, love, know, believe 等といった動詞は進行形でも使える。但し、学習者が英語に十分熟達するまで避けるのが一番だ」と述べている。

これに Visser (1973: 1970) は、言語学の問題に関する真面目な取り組みとしてはあるまじき態度、と憤慨している。確かに、どういう場合に使えるかについての解説が望まれる所だ。しかし Myers (1952: 177-178) も、単純形・進行形の相違についての所見を次の (17) のように締めくくっている。

(17) A number of other differences could be added, but these are enough to show that our uses of these forms depend on an erratic set of habits rather than any fixed principles. Actually, most native speakers have little trouble in making appropriate choices; while intelligent foreigners who try to follow rules are often hopelessly confused. It is easy to forgive them.

即ち、母国語としていれば大抵苦もなく適切に使い分けることができるが、学

習者の場合、知性が高くても規則に則って英語を使おうとする限り、混乱して当然なので、うまく使えなくても無理もない、許してあげましょう、ということだ。文法書を頼りに英語を第二言語として習得しようとする側からは、やりきれないものもあるが、核心をついた使用原則が突き止め難いということかもしれない。規範文法に阻まれて洞察力が曇っているということかもしれない。進行形を使った方がより適切な表現となる状況を意識的に捉えようとしても、出現頻度が低いと一般化に必要な材料を集めるチャンスも少ない。

Hornby（1976）は、使える場合について比較的良心的な解説を施している。例えば（18a）について「仕事が好きか嫌いかについて聞き手の判断がまだ定まっていない場合（Hornby: 1976: 106）」、即ち、流動的な場合に使うと言っている。確かにそういう場合（18a）は使えるが、（18b）も勿論使えなくはない。

（18a）How **are you liking** your new job?

（18b）How do you like your new job?

同様に、次の（19a）について、彼は「he で指された人物が頻繁にものを欲しがることが含意される」と言うが、this time があるのだから、それ自体は（19b）にも当てはまるだろう。

（19a）What **is he wanting** this time?

（19b）What does he want this time?

また、（20a）（20b）の対については、殆ど違いがないと言うが理由は付されていない。

（20a）She **is feeling** better today.

（20b）She feels better today.

おいそれとは覆すのもためらわれる程に、禁則が強力なのかもしれない。

このように進行形記述は、この三百年、乖離した事実と規範との狭間で揺れ動いてきた。Murray の改訂は、それを象徴するものと言えるだろう。

４．英語の現在時制と進行形の原理

さて、前節まで、state 進行形は極めて稀ながらも実際にはかなり昔から脈々と使われてきた事実、それを禁ずる規範が、やや人為的に生じ英語に浸透しその使用を抑圧してきた可能性について概観してきたが、禁則が受容されるには、それだけの何らかの素地がある筈だ。

第一に、state 進行形は禁じられる以前から書き言葉では元々頻度が高くないということがあるだろう。表現対象をイマココに限る現在進行形は、当然発話の場に生じ口語に限られやすい。特に書き言葉の場合、昔は読み手がメッセージを受け取るまで時間がかかったから、イマココの時空における state を読み手と共有することは仮想上でない限り殆どない。獲得したい上品な書き言葉の18世紀の英語では、state 進行形はおろか進行形の頻度そのものも低い。庶民は state 進行形も話し言葉で頻繁に使っていたようだが、そういった既に使っている口語表現は、わざわざ文法書で学ぶ必要はない。書き言葉では稀な口語的表現は、規範文法では捨象されがちである。

Smitterberg など多くの研究者は、近代英語から現在までの corpus に state 進行形が存在しないと言うが、それは、corpus が基本的に書き言葉のデータだからでもあるかもしれない。例えば I am {loving/ hating} は情報の受け手と共有する時空における今の気持ちを表現する性質上、話し言葉として使われることが多い。話し言葉での、発話時の感情や思考・認識などは、発話した端からその場から消えていく。近代の本当の話し言葉は記録に残っていない。従って、まずデータとして残存文献に存在しないものの方が圧倒的に多いと考えられる。またたとえ文字化されたとしても edit されている可能性もある。その上 corpus のテクスト採取源は限られている。Editing が最小限に抑えられている庶民の家族への書簡集 The Clift Family Correspondence などは、入れている corpus がないが、そういったものでは state 進行形の頻度も進行形の頻度自体も極めて高

い。

state 進行形は be 動詞に形容詞が続いたものとも解釈可能なものも多い。Masayuki Higuchi (1987: 32) も、中英語では進行形に状態動詞が使われるとし、Visser は Chaucer の know 進行形を 2 例挙げる。だが、その knowynge は、博識だ、という形容詞という解釈もある。解釈が分かれる場合も corpus から拾う際に割愛されてしまう。

第二に、発話時現在成立している state 自体は、単純現在形でも表現出来る。単純現在形が担う事態は、今の一瞬も成立している。その意味で進行形より守備範囲が広い。進行形を使うのは視界を狭める意味がある時であり、その意味で大は小と同じではないが、大は小を兼ねる。その上、近代初期当時、現代進行形でしか表現できないことも、単純形で表現できた。Hamlet の Polonius の What do you read my Lord? は、What are you reading? の意で使われていることで有名だ。フランス語やドイツ語などの欧州言語では、現代英語では進行形でしか言えないことも、基本的に単純形で表す。これらの言語で進行形が、発達しなかった要因の一つは、必然性がなかったことかもしれない。今の一瞬のこととして言いたければ、at this moment, now などを補えば事足りるし、コンテクストや常識でわかる。進行形は欧州言語では特異な英語に備わった表現の豊かさの一端でもある。

第三に、特に Murray の規範文法の場合、単純化は最優先事項であっただろう。動詞の専門書であればともかく、覚えなければならないことが沢山ある英文法全体をわかりやすくするには、体系的に説明し、要領よく端折る必要がある。習得の便を図る為には、稀なケースや詳しい解説は後回しにして、とりあえずざっくりと典型例を掴むのは妥当な方策だろう。そのためには細かい原理より 2 項対立的な説明の方が単純明快で断然覚えやすい。state 進行形の存在を切り捨てるというのは一つの選択であり、やむを得ぬ仕儀であったかもしれな

い。簡潔さを旨とすることは必定だった。Murray は第 5 版以降も I am teaching は I teach のもう一つの言い方と言い、違いには立ち入っていない。そこまで立ち入ると微細な説明が必要になる。従えば立身出世に役立つルールは、覚えて済めば利用価値は高い。

加えて、第四に、現代英語の現在時制のメカニズムに話を限ると、non-state は進行形でしか表せないということがある。現代英語において現在というのは一瞬である。単純形というのは、事態の全体像を表す。だが、変化や動きは時間が流れなければ認知できない。個別の動きの全体像は一瞬では捉えられない。瞬間で事態の全体像が捉えられるのは、変化がなくどの一瞬で切り取っても同じ homogeneous な state だけだ。従って、単純現在形で表すことのできる出来事は全て state となる（cf. Higuchi: 2008）。動作動詞が単純現在形で使われる場合は、個別の変化や動作そのものではなく、動作や変化を帰納法で一般化した、習慣や森羅万象のあり方、物事の性質・真理、自然法則・原理、法令等等、基本的に state を表すのはそのためである。発話時現在も当てはまっているが、その時だけ成立している事態ではない。そして、現代英語では発話時現在の動きを捉えるには、動詞を一旦 -ing 形にして時間を捨象し、今がその途中の一時点にあると表現する しかない（cf. Langacker: 1991: 209）。この原理は、進行形の圧倒的大多数が non-state を表すということにつながる。それはまた、進行形に動きが強く連想されることに繋がり得るだろう。しかし、だからと言って今生じている state が、進行形で表せない理由にはならない。

state 進行形を禁ずる規範が人為的に生じ、標準英語を築こうとする規範意識によって浸透し共有されていたとすれば、方言や、規範意識から解放された状況、例えば気を許した間柄との会話など使われることが多いことにも説明がつく。例えば、視界を狭めて hot な今の実感に zoom-in し見る必要性のある時なら state でも進行形が使われ得る筈だ。規範を逸脱してでも表現したい内容が

あり、それを表現する手段が自分の文化の中で培ってきて形成してきた無意識の中の言語に available であれば使うだろう。そう考えると、例外に進行形の本質が見えるようにも思われる。

5．事実との整合性

本稿では、単純現在形が図 1 の様に state を、相対的に広い時間の広がりにおいて事態を捉えるのに対し、現在進行形は、典型的には図 2 の様に「here & now」に視野範囲を狭めたスリットで切り取って事態を見る構文と捉えるべきで、進行形自体には、図 2 の様に state の場合もあるのではないかという提案をしてきた。

図 1

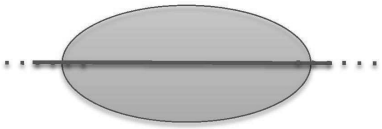


図 2

ここでは、広角視野を楕円で、state 進行形の視野をスリットで図示している。本節では、このイメージの有効性を、実例分析を通して例証したい。ここに試みた分類は勿論便宜上のもので、実際の使用においては重なっている場合が多い。

5.1 With and without always タイプ

進行形の中には、しばしば always の類の副詞を伴って話者の感情的態度（subjectivity, expressivity, emotion, intensity 等とも称される）を表す（Smitterberb: 2005, Kranich: 2010）と言われているものがある。このタイプには、(21a) (21b) の様に state 進行形が生じ得ることも観察されている。

（21a）And he **was always wanting** more than I ever promised to do for any of you. （Graham Green, *Human Factor*）

（21b）... she **was always hating** the very sight of one thing or another... （Katherine Anne Porter, *Flowering Judas and Other Stories*）

あたかも expressivity の為に規則の逸脱が起こるようなニュアンスで言及される。だが、expressivity ということが何を意味するか、このタイプの進行形が、何故単純形の場合と比べてより感情的なニュアンスを帯びるのかを説明する先行研究は見当たらない。

何らかの言動に及ぶことによって当該人物の感情が理解できるわけだから、（21a）（21b）の場合も「行動を表しているという解釈」も可能ではある。だが、直接描かれているのは、その場に流れていた感情と考えても差し支えないだろう。とすれば、このタイプは、ある状況の一場面を zoom-in して切り取る、という進行形の特性が最も顕著に発揮される表現と説明できるだろう。直接経験への視野がスリットで切り取った時点に限られ、一局集中するので詳細イメージが相対的に鮮明になり、それが expressive 等と言われる所以と考えられる。

（21a）（21b）の場合、まず当該人物の問題言動を目の当たりにした時点に zoom することで、その時の情景と共に人物の心の state が細部に亘ってよりリアルに話者の意識上に蘇る。always で幾度となく繰り返されていることが誇張され、増幅された形になると考えられる。

5.2 politeness を醸し出すタイプ

（22a）（22b）の類は、Leech（1971）等でも、断定的となる単純形表現に対し、依頼が一時的なものとして提示されるので丁寧さにつながるケースと解説されている。

（22a）I’**m hoping** you’ll give us some advice.

（22b）We’**re wondering** if you have any suggestions.

その丁寧さは、その場一瞬仮初に思い浮かんだことでしかないという躊躇いがちな言い方でお願いを打診するところからくると考えられ、そこのところは、本稿案と矛盾しない。単純形になると断定的になる理由は、単純形になると、相対的により持続的なお願いの気持ちを表現するからだと考えられる。持続的な依頼表明は、それだけ押しと実行への強制力も強く、相手の負担を増大させる。「今ちょっと」お願いできればありがたいと言う方が、相手への配慮が感じられてあたりが柔らかく polite なのだ。

また、Myers（1952）は、以下のように（23b）（23c）を対照させつつ、状況によっては、進行形が、自分の決断した意思というよりは、必然性を含意するので丁寧な言い方になると指摘し、括弧内にニュアンスが添えられている。

（23a）Want to go fishing tomorrow?

（23b）Sorry, I’ll play tennis.（This sounds like a direct refusal.）

（23c）Sorry, I’ll **be playing** tennis.（This implies that I can’t help it, and really am sorry.）（Myers: 1952: 177）

しかし、そのようなニュアンスになる理由説明はなく、その直後に上記（17）のような、「単純形・進行形の使い分けは、原理というより erratic set of habits による」という見解が続く。だが（23c）の必然性に柔らかさを加えているのは、単純形では実行する動作のイメージ全体が意思の対象となるのに対し、進行形では、話題となっている或る時間帯に焦点を置き、既に明日の行動予定を考えると、当該時点でテニスをするという行為が既に進行中だからであるだろう。その時点の状況を思い浮かべているところが肝要だ。

5.3 Tentative な状況把握タイプ

Comrie（1976: 37）は、知覚動詞は使えない筈の進行形に see が使われている

次の（24）について、これは実際にはピンクの象が見えているわけでなくて想像しているという行為を表していると言う。

（24） I've only had six whiskies and already I'm seeing pink elephants.

酔いが覚めれば見える状況が終わるということを意識しているというニュアンスもあるかもしれないが、これは単に「今見えている」というレトリカルな表現と捉えた方が自然だろう。

これに限りなく近似的な現象が次のタイプである。所有しているという意味での owe は stativity が強く、owe 進行形は、先行研究では *We are owing a house in the country（Quirk et al.: 1985: 198）等に見られる様に、容赦なく非文扱いだ。だが、実際には使われることがある。次の（25）は、訴訟口述公文書である。

（25） But I put to you the case of a man who does not want to sell his property, where he simply owns his property in the belief that he **is owning it** under a good title.

（Reports of the commissioners Presented by both houses of Parliament by command of His Majesty by Great Britain, Published 1911, Royal Commission on the Land Transfer Acts:10 December 1908 Mr. H. M. Knowles. Mr. Trenn Hart. Called in and examined. 2855）

この he is owning it は、話者から見た客観的揺るがない事実としてではなく、「所有していると主張していられるのは今だけだ。」という言い方だ。He の認識に対する話者の捉え方で、基本的には現実現在の事実認識を表す単純現在形では、表現できないニュアンスだ。

次の（26）も同様である。

（26） "The law compels me to grant this petition," said Judge Welch, "but I will endeavor to find a way to avoid such wrongs. We do not allow a Japanese to own land. And yet he **is owning it** in his children's names."

（Administration of Immigration Laws Hearings, 1920, Washington Government Printing Office, p. 404）

これもやはり「本人は手に入れたと思っているようだが、所有権を主張していられるのも今だけだ。」という意味である。話者は、不動の確固とした事実としては認めていない。

「この今だけだ」という感覚が、進行形の「状態を見る範囲を狭める機能」で、間接的に表されている。これを state とせず he has a beer in his hand の has は state とするのであれば、state の定義は改められるべきだろう。

5.4 He was knowing のケース

さて、思い浮かべた一寸の状況を表すのが進行形の中核機能だとする本稿案に照らすと、冒頭の（1a）は容易に説明可能だ。

（1a） He had to remember that this man, helpless, an object on the operating table, he **was knowing** the meaning of loneliness: ultimate loneliness, not too far from the loneliness of dying.（Snow, C. P., *In Their Wisdom*: 1974）

文脈がなければ、孤独の意味を体験中で知識が深まりつつある、或いは、命の終焉と共に「知っている状態も終わる」という境界の意識を示唆している、という解釈も成り立つかもしれない。だが、state と捉えることも十分できる。この一文は、外科医の仕事の日常の淡々とした描写が続く中にある。この進行形の内容は、上記（25a）と同じく that 節中にあり、that 節内の状態は執刀医の視点から間接的に捉えられている。執刀医が一瞥を投げた瞬間の被施術者の内面だ。手術に集中しなければならない医者としては、被施術者を物体として捉えなければ身がもたないが、ここは、自分に生死を任せるしかない生身の人間の心境を一寸だが思いやらなければならないと考える医者の思考描写だ。それを表すのに最適な表現として作家が選んだのがこの he was knowing ではないかと

推察する。

Know は現代最も進行形になりにくい動詞の一つかもしれない。単純現在形の I know という知識状態の境界は、自分では認識できない。一度知ったことは脳に残っている。従って、何かを「自身の今の束の間の知識」として殊更に主観的に認識する状況は、通常かなり考えにくい。その意味では、Vendler が I am knowing というのは英語に存在しないと言うのも無理はない。しかし、知らないのが今だけというのはありそうだ。だから、(1d) I wouldn't **be knowing** that tune や (1e) I **ain't a-knowing** 等の様な例は、比較的出現しやすいのかもしれない。

そして、(1a) は「know が進行形にならない」という訳ではないことを示している。state のある一瞬を切り取った解釈が十分成り立つ。特殊と言えば特殊かもしれないが、本来の進行形の使い方を活かした描写ではないかと思われる。

5.5 I am loving- タイプ

state を表す動詞が使われている進行形として。昨今最も頻繁に見聞きし馴染みがあるのは、I am loving タイプだろう。McDonald のコマーシャルの I'm lovin' it は、様々な意味でインターネット上でも話題にされており、研究者だけでなく、一般の英米人や英語学習者の疑問や解説中に取り上げられている。この loving について、Payne (2011: 292) は enjoying を意味するとし、久野・高見 (2013: 94) もあくまで動的なものと見ている。確かにこれは、ハンバーガーを食す動的な様も彷彿とさせるかもしれない。しかしそれは、進行形がまさにイマココの状況を表すからでもある。この love という言葉の強さの度合いを表現するには、I'm enjoying it では力不足だろう。気持ちは気持ちであり、それ自体は必ずしも non-state の方に分類する必然性はないだろう。ただ、久野・高見は、この「動き」だけでなく「臨場感」という言葉も使っている。そこは本稿

案と整合する。

次の（27）が表現するのも、現在の一時点スリットで切り取る実感である。

（27） I **am still loving** all of it.

これは、筆者からのメールの着信音に反応した、研究書執筆の仕上げに忙しい言語学者の返信からの引用である。彼女はこの本の執筆をもう10年以上も続けてきた。時は真夜中。彼女はいつも独り住まいの静まり返った広い書斎でパソコンの前で奮闘中だ。其処には、出版社とのやり取りや段取り、思う様に時間が取れない事情などなど苦労が綴られる。だがメールのかしこに充実感がある。それが、この still という副詞に表れている。研究執筆に関わる全てが愛おしいのだ。純然たる state で、輪郭（boundaries）が意識される感情ではない。たゆまない愛情は決して一過性のものでもない。方言の響きはない。純然たる native speaker の知的な文面が並ぶ。Hot な自分の今の気持ちを伝える mail ならではの表現ではないだろうか。仮にここで I love it が選択されていたら、「私はこういうのが大好きな人間なのよ」といった、筆者が既に十分理解している彼女の属性の表現となり、ここにはそぐわない。

I love you も今の気持ちは表せるが、通常はより持続的愛情にコミットする。従って、例えば永遠の愛を誓う求婚の場にはより相応しいだろう。進行形でも相手に情愛は伝わるが、今を切り取り focalize する形で刹那的な気持ちを訴えても、それだけでは、結婚という社会的関係を結ぶ必要のある状態になろうとする覚悟を積極的に示すには足りないかもしれない。

（27）の意味は、3 節で触れた、Webster（1784: 24）の、例えば I am loving は I am now in the actual exercise of passion of love を表すという、一連の love 進行形を例にした、進行形詳説と全面一致する。この解説自体は、1790年版等では appendix に移され I am loving は一旦消えるが、1822年の新たな書 *A Philosophical and Practical Grammar of the English Language* では88頁に復活している。前述し

たように、Visser にも神様の愛を実感している例がある。それは儚いものではなさそうだ。

5.6 I am promising タイプ

I promise などの遂行文は進行形にならない、進行形にすると遂行文として機能しない、と、よく言われる。しかしその原理についてはまだ十分な議論がなされていない。

しかし、I am promising ... が遂行文としては機能しないのは、進行形が基本的には発話時その時の状態を表現するだけだからと言えるだろう。約束遂行の意思があるのが、今の一瞬だけでは、約束にならない。I am promising が使われることがないということではない。遂行文として機能しないだけである。これは「今の僕の言動は約束を意味しているんだよ」というように、発話行為を説明することになる。

またこのタイプは、(28) のように、相手のたった今の言動の意味を確かめる場合にも使われる。

(28) **Are you implying** that I'm dishonest?

これは、話者が今耳にした相手の発言の意図を測りかねて、純粋に尋ねる言い方になるので、より定まった相手の態度や真意を問う単純形より格段にあたりが柔らかい。Do you imply that では相手に問いただす口調が伴いがちだ。実際 Do you imply that... より Are you implying that ... の方が口頭のやり取りでは遥かに頻繁に用いられる。

5.7 How are you liking it タイプ

筆者の周りにいる英語の native speakers は、I am knowing は勿論、How are you liking it? なども誤った英語だと言って顔をしかめる。だが、後者の場合、本

人たちはしばしば使っている。上述の Hornby（1976: 106）は、同類の（18a）について、「Do you like fish? が永続的な好みを訪ねるのに対し、こちらは like とか dislike とかの評価が落ち着いていないかもしれない場合に使われている。」と言う。

（18a）How **are you liking** your new job?

（18b）How do you like it?

しかし、（18b）も、永続的でなくても使える。レストランで How do you like your fish ? と聞かれたら今食べている魚料理のことだろう。（18a）は当該 state を現時点で捉え、（18b）は 広角で捉えると説明する方が一般化につながるのではないだろうか。評価が落ち着いていない時に（18a）を使うと感じられるのは、本当は今の気持ちに焦点を合わせているからではないだろうか。

次の（18c）について、Smith（1981）も動的なニュアンスがあると説明しているが、自分が気に入っている状態をまさに今意識した様とも言える。

（18c）I**'m actually liking** this play.　（Smith: 1981: 371）

次の（29a）は、市販の基礎英文法選択問題によくあるタイプの、want は『状態動詞』だから進行形には使えないルールに反するので間違いと答えさせる例文である。

（29a）*Are you wanting to go out tonight?

（29b）Do you want to go out tonight?　（*American Headway 2, Workbook*, p. 10）

筆者が現在使っているワープロソフトも緑色の下線で誤と表示する。しかし、Are you wanting to... という形の進行形自体は、google で検索すると、4,230, 000, 000 件もヒットする。目立つのは、例えば（29c, d, e）の様な、ウェブページを開いた読み手の心に今ある思いに、あたかも目の前にいるかの様に語りかけるものである。

（29c）**Are you wanting to** improve your health and happiness?

（29d）**Are you wanting to** start your own business and pursue your dreams?

（29e）Are you health-conscious? **Are you wanting to** know how to best take care of your heart?

多くの場合、書き手は、読み手の、実現に向けて行動を起こすまでには至ってはいないかもしれない、to 以下の行動に対するその時の意識や、今の「できたらいいな」くらいの気持ち、を捉え、実行への手ほどきをこの後に続ける。即ち（29a）は、（29b）と同じ様には使えないに過ぎない。（29b）は、例えば、会話の流れで相手に生じる協調心理を捉えて相手を誘う時などに日常会話でよく使われる。相手の意向が発話時現在だけのもので一時間後には気を変えてもいいと思って尋ねてはいない。行動を共にしようとしているわけなので、行為の実現までは続く意思であって欲しいと思っているだろう。しかし（29a）も、例えば相手の今の気持ちをさりげなく聞く場合等には使うこともあるだろう。例えば（29f）は、転職希望者に対する面接者の質問としては極自然である。

（29f）**Why are you wanting to** leave your present job?

Why are you wanting to leave で始まるこの手の表現は google でも106,000件ヒットする。Do you では、固まった意思について問うややストレートな言葉となるのに対し、（29f）は今心に浮かべていることを尋ねる。そういったここだけの話として納める相手への配慮が感じられる分、あたりが柔らかい。従って、3.3節で言及した Hornby（1976: 107）の例（19a）も、その一瞬に話を限ることで、温もりのあるものの言い方になる場合もあるだろう。少なくとも Hornby も、耳慣れない表現とは感じないものとして例文に挙げたと思われる。

（19a）What **is he wanting** this time?

次の（30）は、*The New York Times*（December 10, 2009）からの、これまでで一番の贈り物についての一節で、ここでの I am wanting things like... は、固まった望みというより、ちょっと欲しいものといえばということで今脳裏に浮

かぶ思いを表現している。

（30） The best gift I have ever received is a giant teddy bear. When I was younger I was way into stuff animals, one of my friends had this giant teddy bear so of course after I saw hers I had to have one. On Christmas morning I ran down stairs and saw the giant white teddy bear and I fell in love. I didn't put that down for two weeks. These days **I am wanting things** like Wii's and ipods, but every Christmas morning I bring my giant white teddy bear to help me open my new Christmas presents.

勿論これらは口語的だが、それは進行形が今の思いに照準を当てるので、相手が目の前にいるような表現となるからではないだろうか。

5.8 I'm feeling super great タイプ

状態動詞が使われている進行形と単純形との相違説明を試みる Hornby（1976: 106）が、殆ど違いがないと言っているのが、次のペアであった。

（20a, b）She {**is feeling**/ feels} better today.

これは She feels better 自体がもともと短期間の状況についてなので、スコープを狭めても大差ないからと考えられる。いずれも、彼女の今日の気分を何度か観察して今日1日持続していることとして捉えることもあれば、話者が目の当たりにしている今の様子ということもありうる。切り取り方の問題である。

それに比べると being happy は更に束の間の気持ちについて言うことが多いかもしれない。

（31） **I'm being happy**.

この場合、わざわざ進行形でスコープを絞る必然性はない。それが、大江（1982: 83）が、happy を tired や asleep などと同じく、非常に進行形になりにくい形容詞の一つと範疇化する所以かもしれない。確かに（31）は文脈なしではやや奇

妙かもしれない。（31）の google ヒット数は40,100だ。

ところが、they are being happy は、実は google では213, 000件もヒットする[5]。その多くは、次のような場合で、十分 stative である。

（32a）Give your kids more attention and interest when ***they are being happy***. Don't ignore them or leave them to be raised by the TV or video games—and only pay attention if there's a problem. By sharing happy experiences they will learn that joy is ...（*https://books.google.co.jp/books?isbn=0786755258*）

この *they are being happy* は、（1a）の he was knowing と似て、聴者の観察下にある認知主体から間接的に見て取る状況だ。幸せそうかどうかは一瞬の判断対象だ。その一瞬で切り取った把握が進行形で表現されている。幸福感を感じているその時をピンポイントで察知しその場で共感を示すことが大切だと言っている。同じことは単純形では表しがたい。単純形では happy な状況がより持続的となり、ぼけてしまう。*being happy* は間接的で認知主体 conceptualizer の主観的な把握であるという意味でも、（1a）に似ている。また（8a）（8b）の場合と同じく、長い間観察して事実として結論付けた事柄でもないという要素もあるだろう。勿論子供達が楽しそうにしている様子というのは大抵動きが伴うということもあるかもしれないが、必ずしもそれだけで進行形になったとは言えなさそうだ。気持ちは気持ちだ。勿論 He's being happy 等の場合、単独であれば happy なふりをしている場合や、彼の行動を説明している場合などには使われるので、ここでも単独であれば子供達が意図的に幸せを演じているという意味

[5] 因みに、これは google 検索ヒット数なので、その途中に period がある場合や、英文法解説で非文例としてあげられている場合もあるが、（I / you / she / he / we）と（am / are / is / was / were）の組み合わせだけでも、それぞれ５万件から26万件前後ヒットし、そこにはその否定文や短縮形、法助動詞や完了形の環境で生じている場合も、途中に他の語がある場合も含まれないので、頻度が低いとは全く言えない。

も取れなくはないが、この文脈では困難だ。

次の（32b）の are being happy は更に（8a）（8b）の be owing it に近い。

（32b）They “think” ***they are being happy*** and spontaneous but they really are not. Oftentimes, there are torrents of real emotion riding under the surface that explode when reality starts coming into focus. These outbursts are quickly suppressed in ...

“think” の補部節内も、話者が複数の経験観察を通して事実として確信し結論付けた事柄ではない。引用符で明確にされているように、話者の現実認識ではなく、彼らの意識や感覚上のもので、それもかなり刹那的である。but 以下で対照されている話者の現実認識が示すように、state としての解釈は成り立つ。Oftentimes という副詞から分かるように、繰り返し起きていることでもある。この刹那的な危険な幸福感を表現するにも進行形が一躍買っている。

進行形になる頻度としては、feel は頻繁、be happy はやや低いと感じられるのに対し、(33) は、おそらく、これこそ遭遇することのない進行形ではないかと思われる。

（33）*It’s being 5 o’clock sharp.

これは、時計の針が 5 時きっかりを指すのは元々一瞬であり、それを更に視野を狭めて見る必然性がないから、というように説明できる。

進行形が単純形と比べてスコープを狭めて事態を見る構文だとすれば、これらすべてが説明可能だ。

5.9 動性が醸し出される state

本稿案では、動的な状況がオーバーラップする state、も説明出来る。(34) は車で移動中に「ほら今、さっき話していた建物が見えるわよ」「日食を見ている」と言っている動的な状況が浮かぶが、さっと通り過ぎる一瞬、あるいはほ

んのひと時しか見えない静止画的状況と捉えることもできる。

（34） Now we **are seeing** {the building/ a solar eclipse}.

同様に（35）も、発話時現在「英語が聞こえているじゃないか」と目の前の相手に言う場面で使われている。

（35） We're **hear**ing English being spoken.

また、写真は動かないが、始まって終わる動きの途中の一瞬を捉えた状態のある場面として捉えたものを（36）の様に描くこともできる。

（36） She **is sitting** next to her husband in the photo.

（37）は、映画の中で、毎日精神的に疲労して帰宅する夫を喜ばせようと、ドアを開けたら、妻が着物を着て現れる一瞬の場面を演出する英語ナレーションで、日本語では何も言っていない。

（37） Your princess**'s being** a princess.

（『神様のカルテ２』、2014年、東宝映画）

「（あなたの）お姫様は、今お姫様（の出で立ち）よ」という意味だが、これは単純形ではとても表現できないだろう。彼女はお姫様ではないし、いつもお姫様の出で立ちではない。でも今は、彼にとってのお姫様なのだ。

５．まとめ

以上本稿では、state を「認知主体が事態を見る範囲に変化を伴う局面が認識されない、homogeneous な事態」とした上で、state 進行形が実際に使われてきた事実に目を向け、その意味機能を追求した。そして、単純形が事態を広角で描くのに対し、進行形の中核機能は、ある時点に視野を絞りクローズアップして事態を捉えるところにあるとすると、進行形現象の多様な側面を説明付けることができることを示した。

例えば現在進行形がいつの時代も口語に多いのは、発話時、即ち情報の受け

手と直に共有する時空における事態に限って言及するからである。口語が文字化されることが稀だった昔の文献で、進行形の頻度が低いのは当然だ。

state 進行形の頻度が低いのは、基本的には、単純現在形も発話時の state を表すことができ、イマ・ココだけに限った state を文字化することが少ないからと考えることができる。稀であった state 進行形が例外視されるようになった背景に、現在の動きは進行形でしか捉えられないという原理と、規範文法が関わっている可能性も示唆した。

It's being 5 o'clock sharp が奇妙なのは、元々一瞬の state を更に視野を限定して捉える意味がないからである。I'm promising が遂行文として機能しないのは、話者のコミットする約束の効力が発話時だけに留まることになるからである。Always- 進行形が相対的により感情的に 感じられるのは、進行形が事態にクローズアップするので、イメージ画像がより鮮明になるからである。仮初めの知覚や思考も表せるので、それは柔らかさに繋がることもある。

本稿案は、既に200年以上前に Lowth や Webster が definite という概念で、50年近く前に Visser が focalize という言葉で記したことと軌を一にする。本稿はそれを例証・敷衍したに過ぎない。また、これまで、『状態動詞』が使われる進行形に観察されてきた「一時性」とも矛盾しない。一時的に感じられるのは、今の話をしているからに他ならない。但し本稿では、「一時性」は、例外処理の為の概念ではなく、中心義である。そこに軸をおけば、先行研究者達の関心を誘ってきた様々な進行形現象を包摂的に捉えることができるという立場だ。膨大な優れた先行研究が、進行形現象に共通項を見出せなかったのは、進行形は state を表すことはあり得ない、という定説を前提として議論を始めているからかもしれない。

state は進行形にならないというルールは、例外に当面目を向けないポリシーで綴られてきた規範文法に人為的に芽生え・浸透し、state 進行形を抑圧してき

た可能性も論じた。規範文法の利便性は疑いようがないが、禁則は、実情には即してはいない。禁則は規範意識に存在するので、state 進行形は、規範を意識しない場合、する必要のない場合などに比較的多く出現する。多様な方言にも state 進行形が年輪の様に残るのは、それを物語るだろう。しかし何より、英語に備わった豊かなオプションとして、単純形では表現し得ない感性を表現する役割を state 進行形が担っていることも無視してはならないだろう。

また、本稿案では、you'll need it より人間味のある温かい眼差しを醸し出す you'll be needing it や I wouldn't be knowing、I've been knowing や Jesus had been loving her 等の様に、法助動詞や完了進行形の環境で state 進行形が生起やすくなることなども説明可能だが、そこには他の様々な要因も絡まるので、今後の課題とする。

Reference

Primary Sources

Bain, Alexander. 1863. *An English grammar*. London: Longmans Green & Co.

Barrett, Solomon. 1837. *The principles of language*. Albany: O. Steele.

Beattie, James. 1783. *Dissertations moral and critical*. London: W. Strahan; and T. Cadell, in the Strand; and W. Creech at Edinburgh.

Brittain, Lewis. 1788. *Rudiments of English grammar.* Louvain: L. J. Urban.

Bullions, Peter. 1834. *The principles of English grammar*. New York: Clement and Packard.

Butler, Noble. 1879. *A practical grammar of the English language*. Louisville: John P. Morton.

Burr, Jonathan. 1797. *A compendium of English grammar*. Boston: Samuel Hall.

Close, R. A. 1968. *The new English grammar III*. London: Allen and Unwin.

Coote, Charles. 1788. *Elements of the grammar of the English language*. London: C. Dilly.

Farnum, Caleb. 1842. *Practical grammar, a grammar of the English language.* Providence: B. Cranston and Co.

Fenning, Daniel. 1771. *A new grammar of the English language*. London: S. Crowder.

Fowler, William Chauncy. 1851. *English grammar*. New York: Harper & Brothers.

Greenwood, James. 1711. *An essay towards a practical English grammar*. London: R. Tookey.

Harrison, Ralph. 1784. *Institutes of English grammar*. London: J. Johnson.

Hornby, A. S. 1976. *Guide to patterns and usage in English*. (Second Edition), Oxford: Oxford University Press.

Kerl, Simon. 1868. *A comprehensive grammar of the English language*. New York: Ivison, Phinney, Blackman & Co.

Knowles, John. 1785. *The principles of English grammar*. Liverpool: H. Hodgson.

Knowles, John. 1793. *The principles of English grammar*. Liverpool: T. Schofield. (mislaid)

Knowles, John. 1796. *The principles of English grammar*. London: the Author.

Lennie, William. 1866. *The principles of English grammar*. Montreal: John Lovell.

Lowth, Robert. 1762. *A short introduction to English grammar*. London: A: Millar, R. and J. Dodsley.

Miege, Guy. 1688. *The English grammar*, rpt. Menston: Scolar Press (1969).

Murray, Lindley. 1795. *English grammar*. York: Wilson, Spence, and Mawman.

Murray, Lindley. 1798. *English grammar* (the 4th edition). York: Wilson, Spence, and Mawman.

Murray, Lindley. 1799. *English grammar* (the 5th edition). London: Longman and

Rees; York: Wilson, Spence, and Mawman.

Murray, Lindley.1826. *Memoirs of the life and writings of Lindley Murray: In a series of letters, written by himself. With a Preface, and a continuation of the Memoirs, by Elizabeth Frank*. York: Thomas Wilson & Sons; London: Longman, Rees, Orme, Brown, & Green; Harvey & Darton.

Murray, Lindley. 1907. *English grammar* (the 77th impression of the 66th edition printed in 1875), London: Longmans, Green, and Co.

Myers, Louis McCorry. 1952. *American English: a twentieth-century grammar*. New York: Prentice-Hall.

Pickbourn, James. 1789. *A dissertation on the English verb*. London: G. G. J. and J. Robinson and G. Kearsley.

Payne, Thomas E. 2011. *Understanding English grammar: a linguistic introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.

Quirk Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.

Reed, Alonzo & Brainerd Kellogg. 1880. *Higher lessons in English*. New York: Clark & Maynard.

Rothwell, James. 1797. *A comprehensive grammar of the English language*. Warrington: P. L. Wigan.

Sweet, Henry. 1900. *A new English grammar: logical and historical*. Oxford: The Clarendon Press.

Swett, Josiah. 1844. *Swett's grammar*. Windsor Vt.: J. Swett.

Story, Joshua. 1783. *An introduction to English grammar*. London: Longman and T. Evans.

Turner, Brandon. 1840. *A new English grammar; in which the principles of that science*

are fully explained, and adapted to the comprehension of young persons. London: Scott, Webster and Geary.

Webster, Noah. 1784. *A grammatical institute of the English language*. Hartford: Hudson and Goodwin.

Webster, Noah. 1822. *A philosophical and practical grammar of the English language*. New-Haven: Rowe and Spalding.

Whitney, William Dwight. 1886. *Essentials of English grammar*. Boston: Ginn & Co.

Secondary Sources

Alston, Robin Carfrae. 1974. *A bibliography of the English language from the invention of printing to the year 1800*. Ilkley: Janus Press.

Arnaud, René. 2002. Letter-writers of the romantic age and the modernization of English: a quantitative historical survey of the progressive. Accessed at http://www.univ-pau.fr/ANGLAIS/ressources/rarnaud/index.html

Austin, Frances (ed.). 1991. *The Clift family correspondence 1792-1846*. Sheffield: Cectal.

Austin, Frances. 2003. Whatever happened to Lindley Murray? A study of some of the grammar textbooks used in the early teacher training colleges. In Frances Austin and Christopher Stray, Simonton (eds.), *Paradigm: Journal of the Textbook Colloquium 2/7 The Teaching of English in the eighteenth and nineteenth centuries: Essays for Ian Michael on his 88th birthday,* 37-41.

Bando, Yoko. 2004. *The progressive in Jane Austen's works*. Unpublished MA Thesis, Hyogo University of Teacher Education.

Beal, Joan. 2004. *English in modern times 1700-1945*. London: Oxford University Press.

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect: an introduction to the study of verbal aspect and related problems*, Cambridge: Cambridge University Press.

Denison, David. 1998. Syntax. In S. Romaine (ed.), *The Cambridge history of the English language*, Volume IV: 1776-1997. Cambridge: Cambridge University Press, 92-326.

Dennis, Leah. 1940. The progressive tense: frequency of its Use in English. *PMLA: Publications of the Modern Language Association of America*, 55, 855-65.

Dons, Ute (2004) *Descriptive adequacy of early Modern English grammars.* Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Goldsmith, John and Erich Woisetschlaeger. 1982. The logic of the English progressive. *Linguistic inquiry*, 13, Number 1, Winter. 79-89.

Granath, Solveig and Michael Wherrity. 2013. I'm loving you – and knowing it too: aspect and so-called stative verbs. *Rhesis. International Journal of Linguistics, Philosophy, and Literature, Linguistics and Philosophy* 4.1. 6-22.

Görlach, Manfred. 1998. *An Annotated bibliography of nineteenth-century grammars of English*. Amsterdam: John Benjamins.

Michael, Ian. 1987. *The teaching of English: from the sixteenth century to 1870*. Cambridge: Cambridge University Press.

Higuchi, Masayuki. 1987. Chaucer's present participle: the progressive. *Hiroshima Studies in English Language and Literature.* 28-43.

Higuchi, Mariko. 2008. *The semantic function of the English present tense morpheme*, Fukuoka: Kyushu University doctoral dissertation.

樋口万里子. 2010.「現代英語の進行形の歴史と制限 ── 歴史認知言語学の試み ──」、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学編）、第23号、pp. 11-80.

樋口万里子．2011.「英語・ノルウェー語の -ing 形とウエールズ語の VN に関する覚え書き ── 通時的・共時的・類型論的考察へ向けて ──」、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学編）、第24号、pp. 1-71.

樋口万里子．2012.「英語の V-ing 形と Middle Welsh Verbal Noun」『こころとことばの探求：稲田俊明先生ご退職記念論文集』東京：開拓社、pp.347-362.

樋口万里子．2013.「Middle Welsh VN から現代標準英語の V-ing まで」、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学）、第25号、pp. 9-35.

樋口万里子．2014.「Pickbourn（1789）と進行形の制限」、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学）、第27号、pp. 1-35.

樋口万里子．2015.「Lindley Murray と進行形の制限」、九州工業大学大学院情報工学研究院紀要（人間科学）、第28号、pp. 17-58.

Horobin, and Jeremy Smith（eds.）, *New perspectives on English historical linguistics: selected papers from 12 ICEHL, Glasgow, 21-26 August 2002. Volume I: Syntax and morphology*（Current Issues in Linguistic Theory 251）, 153-176. Amsterdam: John Benjamins.

Hirtle, Walter H. and Claude Begin. 1991. Can the Progressive Express a State? *Langues et Linguistique: Travaux du Département de langues et linguistique* 17. 99-137.

Irwin, Betty J. 1967. *The development of the ING ending of the verbal noun and the present participle from c.700 - c. 1400*, Doctoral dissertation, University of Wisconsin.

Jack, George B. 1988. The origins of the English gerund. *NOWELE*（North-Western European Language Evolution）12. 15-75.

Jones, Bernard. 1996. The reception of Lindley Murray's *English Grammar*. In Ingrid Tieken-Boon van Ostade（ed.）, *Two hundred years of Lindley Murray*,

63-80. Münster: Nodus Publikationen.

Kranich, Svenja. 2010. *The Progressive in Modern English: A Corpus-Based Study of Grammaticalization and Related Changes.* Amsterdam – New York: Rodopi.

久野暉・高見健一. 2013.『謎解きの英文法：時の表現』くろしお出版

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. I: Theoretical Prerequisites.* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. II: Descriptive Applications.* Stanford: Stanford University Press.

Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.

Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair and Nicholas Smith. 2009. *Change in contemporary English: a grammatical study.* Cambridge: Cambridge University Press.

Mittendorf, Ingo and Erich Poppe. 2000. Celtic contacts of the English progressive? In Hildegard L. C. Tristram (ed.) *The Celtic Englishes II*, 117-145. Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter.

Osselton, Noel E. 1980. Points of modern English syntax. *English Studies* 61, 454.

大江三郎. 1982.『動詞 (I)』講座・学校文法の基礎第 4 巻、東京：研究社

Reibel, David. 1996. *Lindley Murray (1745-1826): the educational works*. London: Routledge.

Smith, Catherine. 2004. Use of progressive aspect in 18th-century English: A study of personal letters. In Isabel Moskowich-Spiegel Fandino & Begona Crespo Garcia (eds.). *New trends in English historical linguistics: An atlantic view*, 151-186. Universidade da Coruna, Spain.

Smith, Carlota S. 1981. The futurate progressive: not simply future + progressive. *CLS* 17. 369-82.

Smitterberg, Erik. 2005. *The Progressive in 19th-century English: a process of intergration*. Amsterdam – New York: Rodopi.

Sykes, Brian. 2006. *Blood of the isles: exploring the genetic roots of our tribal history*. London: Bantam Press.

Tieken-Boon van Ostade, Ingrid. 1996. Lindley Murray and the concept of plagiarism. In Tieken-Boon van Ostade (ed.), *Two hundred years of Lindley Murray,* 81-95. Münster: Nodus Publikationen.

Tieken-Boon van Ostade, Ingrid. 2006. Eighteenth-century prescriptivism and the norm of correctness. In Ans van Kemenade and Bettelou Los (eds.), *The handbook of the history of English,* 539-557. Oxford: Wiley-Blackwell.

Tieken-Boon van Ostade, Ingrid. 2011. *The Bishop's grammar: Robert Lowth and the rise of prescriptivism*. Oxford: Oxford University Press.

Tolkien, J. R.R. 1963. English and Welsh. In H. Lewis (ed.), *Angles and Britons O'Donnell Lectures* 1-41. Cardiff: University of Wales Press.

Vendler, Zeno. 1967. Verbs and times. In Z. Vendler, *Linguistics in philosophy,* 97-121. Ithaca, New York: Cornell University Press.

Visser Fredericus Theodorus. 1973. *An historical syntax of the English language part 3* (Second Half), Leiden: Boston and Köln Brill (First Published in 1973, Fourth impression 2002).

Vorlat, Emma. 1959. The sources of Lindley Murray's << The English Grammar >>. *Leuvense Bijdragen* 48. 108-125.

Vorlat, Emma. 1975. *The Development of English Grammatical Theory 1586-1737*. Leuven: Leuven University Press.

Vorlat, Emma. 1996. Lindley Murray's prescriptive canon. In Ingrid Tieken-Boon van Ostade (ed.), *Two hundred years of Lindley Murray*, 163-182. Münster:

Nodus Publikationen.

Watts, Richard J. 1999. The social construction of standard English: grammar writers as a 'discourse community.' In Bax, Tony and Richard J. Watts (eds.), *Standard English: the widening debate*. Routledge: London and New York.

Wischer, Ilse. 2003. The treatment of aspect distinction in eighteenth and nineteenth-century grammars of English. In Marina Dossena and Charles Jones (eds.), *Insights into late modern English*, 151-174. Bern & Berlin: Peter Lang.

Wolfram, Walt. 1976. Toward a description of a-prefixing in Appalachian English. *American Speech: A Quarterly of Linguistic Usage*, Vol. 51, No. 1/2 (Spring – Summer). 45-56.

Wolfram, Walt. 1980. A-prefixing in Appalachian English. In William Labov (ed.), *Locating Language in Time and Space (Quantitative Analysis of Linguistic Structure)*, 107-142. New York: Academic Press.